

臨床経験

当院血液内科への紹介患者の解析

恵美 宣彦*

キーワード：紹介患者、血液疾患、血球増多、血球減少、リンパ節腫脹
 短縮表題：当科への紹介患者

いように思われる。実際血液内科の入院患者数もそのところが少ないので、反映しているのかもしれない。

はじめに

藤田保健衛生大学は、東は名古屋市内、西は豊橋市まで、北は愛知県東郷町、南は知多半島周辺を診療圏とする大学病院である。ベッド数は約1500床で1日の外来者数は2000人あまりである。当院血液内科に地域医療連携を通じて紹介された患者を解析したので結果を報告する。

紹介施設の解析

2009年1月から12月までに当院血液内科に地域医療連携を通じて紹介のあった患者数は、276例である。地区別の紹介患者数は、図1に示す。名古屋市内はどの区からも紹介されているが、近隣の緑区からがもっとも多い。他の区からの紹介は、患者または、家族の居住区が当院に近いケースが多い。表1に主だった施設を示す。半田市民病院より紹介患者が多いのは、当院血液内科が外来を週2回行っているためと考えられる。安城更生病院よりの紹介は、患者居住区の問題にて紹介された患者が主体である。開業医、クリニックよりの紹介は年間1-3例程度であるが、杉浦医院よりの紹介数は昨年度9症例と多かった。

月別の紹介患者数を表2に示す。季節による大きな変動はないが、やや秋から冬にかけては少な

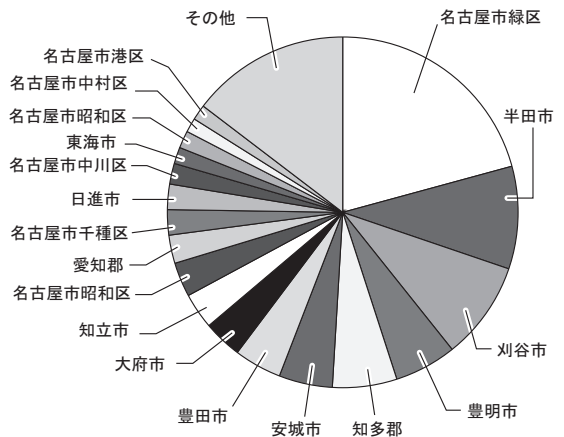


図1 地区別紹介患者数

表1

主な紹介施設	症例数
半田市民病院	18
杉浦医院	9
名古屋市立緑市民病院	8
安城更生病院	6
みずのクリニック	5
長寿医療センター	5

表2

月別の紹介数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
患者数	24	24	19	30	20	27	30	20	29	23	19	11

* 藤田保健衛生大学医学部血液内科 教授
 (えみ のぶひこ)

紹介の基礎となった所見

紹介状に記載された内容を所見別に分類をした結果を図2に示す。複数記載のあったものは、主な症状に統一した。一番多かった所見は、貧血であった。一部の病院ではマルクまで施行して診断のついた例があったが、多くの紹介は末梢血データをつけての紹介であった。鉄欠乏性貧血は、ほとんど紹介されておらず、各施設にて対応されていると考える。

その他の血球減少は図2に示すような割合で見られた。骨髓異形成症候群、特発性血小板減少症など血液疾患であった例もあるが、ウイルス感染後の一過性であった例や、薬剤性と考えられる例も見られた。高齢者の血小板減少症に関しては、血小板数5万以上で臨床的出血のない例においてはそのまま経過観察だけをお願いしている例もある。

白血球増多症に関しては、検査の結果、芽球を検出して紹介されることも多く、緊急に電話連絡があった例も多い。また、好酸球増多症や検診で高値を示して紹介された慢性骨髄性白血病も見ら

れる。骨髓増殖性疾患である多血症、血小板増多症は外来にて投薬を開始して経過を観察している症例が多い。

リンパ節腫脹の患者に関しては、病院によっては生検を施行して悪性リンパ腫の確定診断後に紹介になっている例もある。ウイルス性のリンパ節腫脹の例も多く経過を見てリンパ節生検を行っている。

CT、胸部XP検査にて異常陰影のあるために紹介になった例も見られた。主にリンパ腫の疑いで紹介されている。画像所見は問題なく、生化学検査にて、M蛋白が出現されて紹介になる例が最近多いように思われる。蛋白分画を採血時にオーダーして、偶然見つかったために骨髓腫を疑って紹介となっている。その他の例は、凝固異常、確定診断後の転勤などによる転院希望の紹介などが含まれている。

おわりに

愛知県保険医協会の講演では、実際の症例内容を提示して検討を行ったが、紙面では省略させていただく。講演後に出席者から血液内科のある施設に紹介するタイミングに関して質問が出たが、実際には重症度もあり一概には難しい。出血傾向にかかわる疾患は、早めの対処が必要なので、採血部位の止血状態、皮膚の出血斑などを観察することが大切である。

最近、血液疾患の開業医向けの良い本が出たので参考文献として紹介をする。血液疾患の最近の情報と専門施設に紹介する基準の記載もあり、役に立つと思われる。

参考文献

宮崎 仁：血液疾患診療ナビ 南山堂 2010
 鈴宮淳司、竹尾高明、伊豆津宏二：血液疾患の病診連携 医薬ジャーナル社 2010

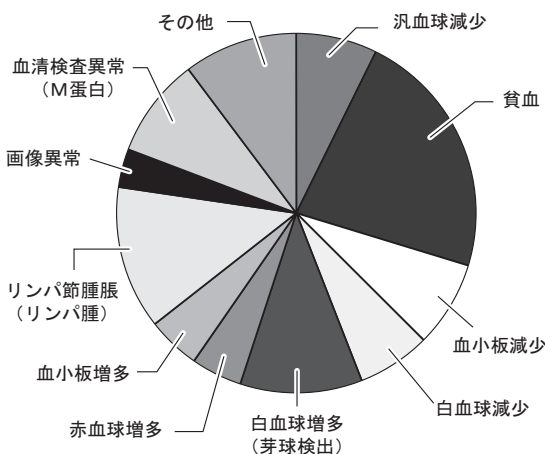


図2 紹介内容別の分類